

《題目》「激務の BSE—退社は AM0～3 時」

既に、20 年弱前のことですが、2001 年 9 月に、日本で BSE ハプニングが起きました。BSE と行って、判らない人には、狂牛病と言った方が思い出して貰えるかもしれません。なぜ、呼び名が変わったのか？その数年前に、欧州で家畜牛に、この病気が発生した際に、歩行困難になったりする様子から、Mad Cow Disease と呼ばれましたが、その後の研究から、狂犬病のように狂っているのではなく、異常プリオンの蓄積により脳組織が圧迫されたことによる機能不全であることが判明し、BSE(Bovine Spongiform Encephalopathy)が正式名称になったのです。

当時、BSE 診断用の検査薬は、3 つしかなく、その中でバイオ・ラッドの BSE キットが、日本での全頭検査用に採用されました。しかし、動物用検査薬として、農林水産省の認可（動物用である為）を取っていた製品はなく、採用決定後、『今直ぐに、書類と整えて、認可申請をしてくれ』との連絡がありました。当然、同省での申請書類のチェック期間も必要でしたから、特に『至急』提出する必要がありました。関係する社員に、診断薬事業部の経験者を加え、殆ど徹夜で書類を仕上げ、間に合わせました。この間、各種マスコミへの電話対応もあり、電話対応に当たっていた 2 名は申請書作成業務に加われるのは、夜 7 時か 8 時になってからでした。ですから、当然、殆ど徹夜に近い状態で働いていたわけです。

認可が取れ、食肉衛生検査所での全頭検査がスタートすると、問題なく検査業務を進めて貰えるように、全国約 150 か所の同検査所を 3～4 名で、北は北海道から、南は沖縄まで同施設を訪問し、気が付いた点を指摘し、また、質問に答える活動が待っていました。1 ヶ所の御施設で、朝 8 時半から夜 9 時過ぎまで、丸一日必要でしたから、全部の施設を訪問するのに、2 か月以上かかりました。その後も、問題やトラブルが発生すると、即座に該当施設を訪問し、状況を把握し、改善策を提示するわけです。このような状況の中で、全国の検査所の訪問指導では、若手社員の頑張りにより、2 ヶ月という短期間で完了したのです。当然、学術面の指揮を執る私と、販売戦略や国の関係省庁との交渉などの指揮をとる S 氏の二人も、時間の許す限り、訪問指導に回りました。

このような勤務状態が、2 年程続きました。当時、私は 40 代後半でもあり、若いときほどの体力はありませんでしたが、不思議と疲れは感じませんでした。それは、当時の社長や事業本部長の、我々に対する手厚い配慮があったこともありましたが、最も重要だと感じたのは、『この全頭検査の体制を成功させなければ、日本の畜産農家やその業界を守り、さらに、日本人の牛肉に対する嫌悪感を拭い去ることはできない。その為に、絶対に成功に導く必要がある』と言う社会的使命を感じていたからです。もし、このような勤務が常態化していたなら、あんなに頑張れなかったと思います。

当ホームページにも記しましたが、私の好きな言葉に『やってみせて、言ってみせて、させてみて、褒めてやらねば、人は動かじ』というのがあります。ご存知のように武田信

玄に言葉です。

やってみせて＝部下や後輩にやらせる仕事を、実際に目の前でやって見せる

言ってきたせて＝やらせる仕事の重要なポイントだけでなく、意味や意義、目的なども説明する

させてみて＝1回だけやらせて評価するのではなく、複数回やらせる中で、適切な指導を行う

褒めてやらねば＝いつも褒めてだけいるのではありません。やる気が出さず褒め方とは？

人は動かじ＝そのようにしなければ、とりあえず怒られないようにだけ仕事をするようになる

だから信玄は、『人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇は敵なり』を信念にしていたのだと思います。経営者の皆さん、お客さんだけでなく、社員を“味方”につけていますか？